

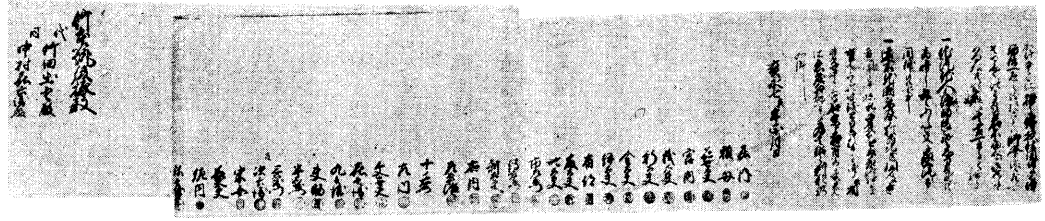
出語りの始

竹田近江、出雲との提携

元祿が終つて世は寶永元年の秋と移つていつた。こゝに義太夫生涯の上に大きな謎が投ぜられたのである。凡そ偉人とか、大藝術家などには往々にして、普通人の知ることの出来ない心境があるものである。これもその一つには相違ない。

竹本筑後掾こと病氣により竹本座の座本を退く。

さあ解らない、新派淨瑠璃義太夫節なる一流を興し、生涯をこれに打込んでゐる筈の義太夫、十八年間の苦節を忍んで、とても常人の及びもつかない堅忍持久を続け、ちつとやそつとの辛抱でなかつた辛抱をして、悪戦苦闘をして來た義太夫、而かも近松門左衛門下阪によつて、やうやく『曾根崎心中』なる好狂言を得て、藝術的にも經濟的にも立派に成功したその一年を出ずして、些々たる病氣ぐらいで竹本座の座本を退くといふのだから、ことはいよく解らない、とても想像が出来ない、藝術家にのみ許される、何か特異な心持が突如として義太夫に起つて來たのに違ひない。かうして義太夫は、ひとりさつさと舞臺生活から退いて行つてしまひ。くるくると頭を剃髮して、道喜といふ法號に改め、拍手扇を持つた手に珠數をつまぐり、床本を経卷に代へて、朝夕を御寺詣でに過ごすといふ、たいへんな變りやうである。驚いたのは門弟達である、義太夫節は茲に又新しい境地を拓いて、ますます世間に認められやうとしてゐる大事の瀬戸際、頭領に出でしまはれては、杖に離れた盲目同然、これでは、なんにもかもまる潰れだ。門弟達は當然これを黙つて見てゐるわけには行かない、さつそくに、一同はこぞつて義太夫の面前へ出て、涙をふるつて復座を嘆願した。門弟達が縷々述べるところの一言一句、もとより義太夫節の前途を思ふての上からであり師弟の情まことに濃やかに、熱誠おのづから面にあふるゝばかりである。これを聞いてゐる義太夫とて、もとより人一倍血も涙もある人だ、門生が訴ふるところの至情の言葉には動かされぬわけには行かなかつた。さうして己が義太夫節の百年の後を考ふる時、どうも今度の行動は輕率であつたやうに感じたのである。實を云ふと、義太



教訓速照狀

これも一座に加へることになり思ひきり花やかに蓋を開けたが爲に、これまた非常な大當り大好評であつた。近松はこの記念興行を祝福する爲に、狂言中に竹田家の意を體して記念文字を入れてゐる。第一段内裏の一節に、勅詔あつて、諸國の職人に官位を興へ、官名受領の認許あるくだりの文中

此時よりや諸職人、今も國名を許されて時に近江や世に出雲、そのよるづ代も竹の名の、筑後の後の末長寺御代に住む身ぞ豊かなる

義太夫はまた、この興行に始めて舞臺に顔を現はして演ずることを試みてゐる。さうして第三段目の『鐘入りの段』の景事を出語りして、見物を喜ばせた。たゞに見物を喜ばせたばかりでなく、これがそも／＼太夫出語りの濫觴なのだから、すこし當時の實際を述べて置かう。

戯曲や歌舞の類に謡曲道成寺を轉用した所謂『道成寺物』と稱するものは、可なり澤山にあるがこの鐘入りの段も、つまりはそれで頗る奇抜な趣向に劇化してゐる點、殊にその構造の群を抜いて大まかな點から見て謡曲以上かも知れない。謡曲では貴族的優美な白拍手であるシテ女を極めて民衆的な焚飯女に變へて登場させ『これは此國の傍らに、下司奉公の勤めをいたす飯焚きの女にて候』と語らせ、先づ見物の意表に出て耳目を驚かしてゐる。これは單に奇抜な趣向をしたといふばかりでなく、町人の都としての大阪の土地にふさはしく、作者が平民化した一つの見識でゞもある。而かも此一段の文章は、作者獨特の景情備はつた麗文で、絢爛自在の趣きがある。こゝを演者義太夫は苦心の節調で語りこなしたのでから、この一幕が當興行中隨一の呼び物になつたのは當然である。日本で始めて出來た遊君の元祖、播州室の津の室君が、假りに飯焚きの女中に姿をやつして、その夫が世を忍ぶ播州高砂尾上の濱へ訪づれてくる。そこには海中から現はれた天竺の祇園精舎の名鐘があつて鐘供養が行はれてゐる。女人の出入りは禁制といふことになつてゐるが室君はある誤解から嫉妬に燃へ立ち心も狂亂して、鐘供養の庭へ侵入する。そして鐘の中へ姿を隠す。この大騒動に、豊國禪師が弟子を引連れて出て大祈禱をすると、功驗忽ち現はれて鐘は自づと躍つて鐘は鐘樓へ引き上げられる。『アレ見よ蛇體は顯はれたり』でいよいよ一日中の大評判である『鐘入りの段』が始まるので

ある。

當時の舞臺の有様をいふと、正面に翠簾が吊るされてゐて、太夫三味線弾き等はその内部で勤め、人形遣ひはその前面で技藝を演じたものである。舞臺の全部を今日の文樂座で見るやうに總て人形の領分に占有させ、太夫三味線の席が側面に遷された形式は義太夫や近松歿後の變革である。この變革がやがて操淨瑠璃が歌舞伎に壓倒されて行つた變轉を物語るものだと云つてもよい。

さて此時、この晴れの記念興行を意義あらしめる爲め、義太夫はいつも翠簾の内で語る例を破つて、それを高く掲げさせ、顔を見物に現はして語る例を始めた、この新しい形式を出語りと稱したのである。いよく鐘入りの段となると、正面の簾がさらりと上る、そこにはシテ、竹本筑後掾、が見臺を控へ、鱗形の模様のある袴を着て（室君の蛇身に因んで）一刀を佩し、扇子を斜に構へて座つてゐる。ワキには竹本難波、三味線の竹澤權右衛門が九枚笹の紋模様袴に三味線を抱へてズラリと居並ぶ。かういふ舞臺の光景に始めて接した見物はドツとばかりに喝采した。

その前では、これもおやま人形の辰松八郎兵衛が全身を現はして、曾て曾根崎心中で試みた出遣ひの形式で、思ふ存分室君の蛇體を操つて満場を酔はしめた。

なほ又義太夫はその冒頭の名文、

涙川戀の水に閉ぢられて、身を切り碎く思ひより、浮き川竹の變き節を、せめて聞もる月だにも、あはれ枕に訪ひも來ず、我れ一人寢こなりたるぞや。

ひそり立つたる一ももさ薄、如みの露の重たさよ。

特に巧い節調で語り生かしたものと見へて、市中の一口淨瑠璃にも口ずさまれたといふことである。

なほもう一つこの淨瑠璃で、義太夫の見識といふものが現はれて感銘のふかい事は、本文のうち、廓の遊女の年中行事、紋日の事を叙べたくだり

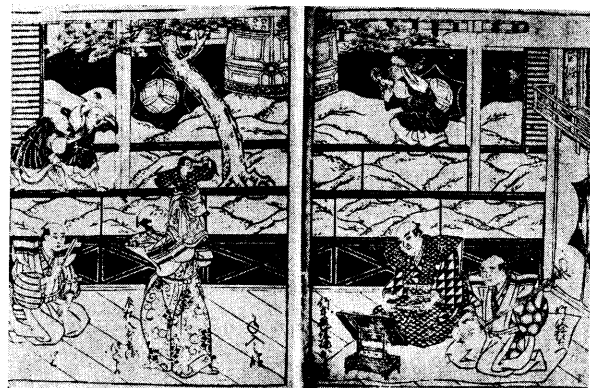
人のよろこぶ日云へば、我はなげきのます鏡

に節付けられた『愁ひの冷泉節（れいぜんぶし）』についてである。



圖の「鑑人職皇天明用」

本来冷泉節といふものは、古淨瑠璃『十二段』にある『さてもやさしや冷泉』の句につけられた華やかに艶麗な節廻しを云つたもので、(冷泉とは三河の國矢矧の長者の娘淨瑠璃姫に仕へた侍女の名である)あるが、義太夫はわざとこれを愁ひの文章に使用したのである。かうした試みは、古淨瑠璃の人から見ると、破格の振舞、異端の業で、果せるかな批難の矢を浴せられたが、義太夫は自己の信



面臺舞「段の入鐘人職皇天明用」

* 念の上に試みたことだからビクともしない、歡樂の極みと哀傷の極みはわづかに薄紙一枚を隔てた差異に過ぎない、廓の女の愁ひ華やかなうちに悲しみを表はさねばならない、艶麗なうちにも何處か哀愁を帯びた『冷泉節』こそ恰好の節調であると信じたからである。これは勿論口で語るといふより心持で情を活かして語らねばならぬだけに、古來至難の節調として傳へられてゐる。されば二世竹本義太夫(政太夫)もその門下に説いて『これは愁ひの冷泉なり、常の冷泉に語れば、人形いそ／＼として嬉しさうに躍るべし、文句に氣をつけるべし』と訓へてゐるほどである。

六十四歳を一期

義太夫終焉と墓地

用明天皇職人鑑以後の十年、義太夫はひきつゞいて、竹本座に出演してゐるが、記録はその上演狂言を左の如く示してゐる。これはもとよりその重なるものであるが。

『傾城反魂香』『心中二枚繪草紙』『兼好法師物見事』『碁盤太平記』『曾我扇八景』『吉野忠信』『堀川波の鼓』『緋縮緬卯月紅葉』『同潤色』『丹波與作』『酒吞童子枕言葉』『心中萬年草』『淀鯉出世瀧徳』『五十年忌歌念佛』『梶狩劔本地』『今宮心中』『百合若大臣野守鑑』『心中及水朔日』『夕霧阿波鳴門』『冥途の飛脚』『吉野都女桶』『姫女姥』『傾城吉岡染』『長町女腹切』『天神記』『孕常磐』『大職冠』